『教育フロンティア』5号　一九六四年九月（全国プログラム学習連盟編／教育出版）

ヒューマニズムと機械化

イギリスの大新聞「ロンドン・タイムス」教育版が、「教育の機械化」の特集を行なった。あの保守的なイギリスがと驚く人がいるかも知れない。私も実は驚いた一人である。着実に、しかもはるかに日本よりは先に進んで、この問題を考えている。否、考えているばかりではない。実験し、実践し、普及するための大事な布石を着々と行なっている。日本では夢物語のようなことが、もはや常識となって、みんながそれに向って如何に努力するかが語られているということはどういうことだろうか。

教育の機械化などということは、日本では禁句である。神聖な教育を機械がやるなどとはもっての外ということになりそうである。そんなことはよまいごとだということはフロンティアの読者は知っている。つまり、古い教育観では教育を教師だけの仕事だと考えている。教師一人が頑張れば教育になるという考え方である。この考え方が実際は、当の育てられる人、学習する人を忘れている結果になっていることを、多くの人は気づかないでいる。

学習者からみれば、自分が活動しないでは、教育されていることにはならない。その活動は、教師の話をきくばかりでなく、自然のものをみることでも、書を読むことでも、様々なものにふれることにおいて行なわれるのである。それが自分を育てているのである。だから学習する人を大切にするなら、その人間が活動できるような場をつくってやることではないか。それが本当の教師の仕事というものである。教育の場をつくることは、つまり教育のエンジニアリングである。

学習者を大切にする教育、つまり新しい教育のヒューマニズムであるが――これが教育工学を生み出し、教育の機械化を必要とするということは大切な点である。

プログラム学習の考え方は、教育が集団に対して行なわれようと、個人に対して行なわれようと常につらぬかれなくてはならぬことである。刺戟反応のドゥーイング、フィード・バックということは常にあるべきものである。これが学習する人間を大切にする所以である。それが教育工学の考え方である。イギリスが、この考え方を前面に出して、教育の機械化を考えている実情を読みとっていただきたい。

（矢口　新）